

建学の礎を見つめ直す——大隈重信・小野梓と東京専門学校

〔講演Ⅰ〕

小野梓を支えた土佐の人びと——伊賀陽太郎、馬場辰猪、小野義眞

井上 琢 智

I

井上 ご紹介いただきました、関西学院大学の井上です。今回、このような場にお呼びいただき、ありがとうございます。ました。

学生の方の中には、大学史、自校史の受講生の方がおられるということですが、私たちの関西学院大学でも、「『関学』学」という自校史の授業を十数年間開講しています。今年の受講生は約一、五〇〇人で、別の教室でテレビ

を使って授業をしています。採点が甘いことから多くの受講者があると思うのですが、来年度は、同じ授業を春学期と秋学期に開講することになっています。ただ、私学にとって自分たちの学校の建学の精神を知ることとは極めて重要なことであり、この自校史が「楽勝科目」だとしても多くの学生さんが受講され、建学の精神を知ってもらう必要があると思っています。その点で、この講演会では、早稲田大学の建学の精神にとつて重要な大隈さんと小野さんを取り上げることになっているのだと思います。私自身は、自分の関心から、小野梓そのものではなく、小野を支えた人びとを具体的にお話したいと思っています。時間が三〇分にもかかわらず、多くのレジュメを作りましたので、具体的な内容については、それをご覧いただきたいと思っています。

関西学院の初期の卒業生に永井柳太郎という方がいます。永井柳太郎は関西学院普通学部を卒業後、一九〇一年に東京専門学校に入学されました。一九〇四年の早稲田雄弁会での演説「産業保護政策に就て」が大隈さんの高い評価を得て、他方ユニテリアン団体の奨学金を得てイギリスに留学し、帰国後の一九〇九年に早稲田大学教授になられました。その後、ご承知のように永井さんは政治家になられました。この永井さんは後にしばしば「オックスフォードは我に世界を紹介し、早稲田は日本を、関西学院は我に人世をしらしめた」と言っていました。この言葉は、それぞれの学校が、それぞれの目指しているところを示していると思います。関西学院はキリスト教主義教育を建学の精神とする学校ですので、「全人教育」に非常に力点を置いていますので、そこで人間を学び、早稲田で日本を知り、オックスフォードで世界を知り、永井さんは政治家を志したということになります。

このような文脈の中で、東京専門学校、早稲田大学を捉えるときに、やはり、小野梓の考え方は極めて重要であるうと思います。後に小野梓や大隈重信の話が出てきますが、私自身は、むしろ、それを支えた人びとの中から、展示会でも紹介されるなど早稲田では比較的知られている小野義真さん、さらにはこれまでほとんど知られることがな

かった、テーマに掲げています伊賀陽太郎という人物を取り上げて、お話ししたいと思います。

私自身、伊賀陽太郎という人物を知るようになったのは三〇年近く前です。宿毛……、宿毛って、どこにあるかご存じですね。早稲田の方であれば、小野梓の生地ですので当然ご存じですね。最初、宿毛へ調査に行った頃は、鉄道がなくて困りました。で、私は、宇和島の方からバスで行きました。ただ、印象に残ったのは、当時の正式な名称は思い出しませんが、おそらく現在の宿毛歴史館の前身だと思うのですが、その研究員の方からこのように言われました。今、テレビでも話題になった吉田茂の父親が、竹内綱ですか、「そういう有名な人々を出したにかかわらず、政治的権力によって自分の地元で鉄道を引かなかったことが自慢である」と。鉄道が引かれたのは平成になってからですから、宿毛の人びとが、地元ではなくて、日本を見て、そして世界を見て、自らの意志を貫こうとした。そのことを今なお自慢しておられるのに感動したことは今も忘れられません。山内家、さらには土佐全体に、そのような気が育っていたのではないかと思います。当然、そこには岩崎彌太郎がいますが、岩崎は比較的よく知られている人物ですので、参考になる限りでお話をしたいと思います。

お手元のレジユメをご覧くださいと思います。そこには土佐のイギリス留学生を挙げています。その中によく知られていますように、馬場辰猪、真辺戒作、その以下の方は、ほとんどご存じないと思います。馬場辰猪だけは、自由民権運動に関心のある方はご存じだと思います。岩波書店から『馬場辰猪全集』も出ておりますので。馬場は民権運動の中では重要な人物であり、しばしば、小野梓と対比されることがあります。私の最終的な関心は、小野梓と馬場辰猪を比較することにあります。ただ、この講演会は学校の授業でもありますので、あまり細かな議論をせず、これらの人びとと生んだ土佐の人間関係をお話したいと思います。

重要なのは、馬場辰猪がロンドンに留学した際抱いた日本人留学生についての認識なのです。「その頃、ロンドン

には、約百人ほどの日本人留學生がいた。…出会った二人（の日本人）は、お互いにとこの国の者だかまったく知らないような顔をして、通り過ぎてしまうのであった。その理由は、彼らの頭の中には、まだ、封建時代の感情が多くのこっていたからである」（「自伝」）。日本の近代化を進めなければならぬと考えていた馬場には、日本人としてのアイデンティティーをいかに確立するかが大きな関心であったことだと思えます。すなわち「藩ナシヨナリズムから脱皮するには、いかにすればよいか」という視点が馬場にあったということです。まさに、土佐という太平洋を目にして育った土佐の人びとの中から―私は環境決定論者ではありませんが―このような視点をもつ人びとが生まれてということなのです。その中でも馬場は、一番若くして留学し、優れた頭脳を持ち、かつこのような視点感覚を持って、「いかにして、この藩ナシヨナリズムから脱皮して、日本という国家をいかに作るか」ということに腐心しただろうと思っています。この馬場辰猪と彼を支えた伊賀陽太郎と小野義眞を軸にお話したいと思います。

II

伊賀陽太郎については、ほとんど知られていませんので、簡単に紹介したいと思います。山内容堂の甥として宿毛に生まれました。一二代目であります。現在の当主は一五代目で、私もお会いしたことがあります。そのお父様から、資料のコピーをしていただいたのが二〇数年前でした。私の怠慢から、長いことその研究を完成できず、やっと「イギリス留學生伊賀陽太郎宛書簡に見る日英交流（一）（二）」（二〇〇八）として公表できましたが、その遅延に改めてお詫び申し上げます。

伊賀陽太郎は、宿毛の邑主として、戊辰戦争では宿毛を代表して機勢隊を結成し、その指揮をしました。戦後、「世

界を知るためには国内ではだめだ」ということで、学問に非常に熱心であった父氏理は陽太郎に留学するように勧めました。当時、宿毛はかなりの借金があったようですけれども、小野義真たちがその借金を返済するために大坂で様々な工夫をすることで、当時のお金で一万円のお金を宿毛に渡すことができました。おそらくその一部が留学資金となったのではないのでしょうか。陽太郎さんは一〇年間の長きにわたってイギリスに留学しています。詳しい内容は資料にある年表に書いてありますので、ご覧いただきたいと思います。

帰国後、陽太郎さんは岩崎の三菱、そして農商務省、さらには東京商業学校―一橋大学の前身で、当時は農商務省に属していましたが―で教員をされ、退官後、地元に戻られています。

伊賀陽太郎については、研究文献が多くあるわけではありません。寺石正路『土佐偉人伝』（一九二四）や『宿毛人物史』（宿毛明治百年史（人物史）一九六八）がありますので、お読みいただければと思います。

このように伊賀陽太郎は、小野梓よりも、生没年を見ていただければお分かりのように、年上で、上司に当たりませんが、仲間としてともに勉強もしています。小野梓の義兄の小野義真もちろん宿毛の人ですが、馬場辰猪は宿毛の人ではありません。

それでは上司に当たる伊賀陽太郎が小野梓を支援した内容を具体的にお話ししたいと思います。例えば、現在書簡は未発見ですが、おそらく一八七二年一月一二日以前に、小野梓は伊賀陽太郎へ、*How we are governed* という本を送ってほしいという手紙を出したのだと思います。当時、伊賀陽太郎はイギリスに滞在していましたが、アメリカに滞在していた小野がわざわざイギリスに滞在する陽太郎さんに「本を買って、送って下さい」とお願いしてるんですね。それに対応して、一八七二年二月一〇日（投函は二日ですが）付け書簡で、伊賀さんは「十一月二日、同書を送付した」と小野梓に返事をしています。これらの遣り取りもまたお預かりした資料から明らかになっていま

実は、この本は、de Fonblanque Albany という人のものでして、すでに一八六八年に鈴木唯一によって翻訳されています。従って、この翻訳を小野が事前に読んだことがあるかどうかは分かりませんが、この翻訳は、当時イギリスの議会政治を日本語で学ぶことのできる参考書の一つでした。福沢諭吉の書いたイギリスの憲政史がありますが、この翻訳本は、山縣有朋読んだといわれているもので、書名は『英政如何』で、和本だったと思います。

このように伊賀陽太郎さんは、自藩に属した人びと相互のコミュニケーションのキーパーソンになっていたということです。その例をさらに紹介したいと思います。小野梓の友人の、Tanano — この人物の詳細は分かりませんが — 「Tanano が死んだということを知ったが、非常に残念だ」と書き送ったり、一八七二年にアメリカに留学していた岩崎弥之助の留学のことや小野梓の身体を心配して、伊賀陽太郎さんは、「万事うまくいくように頑張りなさい」という手紙を出しています。加えて、その後の手紙なのですが、「あなたと頻繁に連絡が取れてうれしい」、「仲間との交流の喜びは、重要な学習の邪魔になる」、「つまり「日本人同士や、藩士同士がロンドンの中で、いろいろと飲み食いしたりするのはけしからん。そんなことは、やっぱり勉強のためによくない」と忠告しています。つまり、「日本人同士の集まりは、日本語ばかりしゃべっていて、英語も勉強できなくなる」と注意を喚起しているんですね。そのようなことはやめて、むしろ手紙で、もちろん、英語の手紙ですよ。英語の手紙も資料に載せていますので、ぜひお読み下さい（「伊賀陽太郎の滞英時代の英文ノート」二〇一〇）。留学して数年しかたっていない当時の日本人の英語がいかにも素晴らしいものであるかというのが分かります。そしてこのような「手紙のやりとりは素晴らしいだろう」、「お互いの友情を強めることもできるし」と書いています。

今度は、逆の例を紹介したいと思います。アメリカ人ウエーランド (F. Wayland) の *The Elements of Moral Sci-*

ance という、これは福沢諭吉等が参考にした有名な本ですが、伊賀陽太郎さんは「これを、アメリカで買ってイギリスへ送ってほしい」と小野に書き送っています。それは、自分がそれを使うためではなく、滯英中の同郷の西村猪三郎さんが勉強のために必要としていたものなのです。このように伊賀陽太郎という方は、邑主としての立場を自覚しており、その立場から仲間同士コミュニケーションのためのキーパーソンの役割を果たしておられたということです。そのことは、後のことですが、馬場辰猪と小野梓が、非常に不仲といえますか、意見が合わなくなった後も、伊賀陽太郎さんは、その仲介に立つことになります。お手元の資料年表を使ってご紹介をしたいと思います。

小野梓と馬場辰猪はともにロンドン時代には、「脱藩ナショナルリズム」の実現のためにロンドンでの日本学生会の結成と、その日本での継続版である共存同衆の運営とともに協力しあっています。しかし、共存同衆が解散された後、二人の意見は急速に変化し、対立するようになっていきます。小野梓は、二院制を主張し、イギリスの議会政治を目指しますが、馬場辰猪は一院制を支持します。幾つかその資料を挙げていきますけれども、馬場辰猪の一院制の主張は、「上院議員というものは、まさに貴族の議員であって、そういうものは、いわゆる民衆の議会を否定する形になる。で、そういうものは要らない」という立場に立っていきます。しかし、小野梓は、近代日本ではその二院制を最終的に採用していきますけれども、二院制は「そのバランスの中に、その政治を求めべきだ」という考え方をするようになっていきます。その対立を伊賀陽太郎さんは仲介しようとして、食事を誘い、思想の対立を超えた人と人との繋がりを維持させようとしています。

ところで、伊賀陽太郎さんは、宿毛出身ではない馬場辰猪をも支援しています。馬場は留学中のロンドンで自分の同僚の真辺戒作とけんかの末、傷付けて、日本人で初めて監獄に収監された人となってしまいました。収監された際、馬場は自分の邑主ではない伊賀陽太郎さんに手紙を送っています。「警察署に出頭して、監獄に来てくれ」と。

その上で「自分の大切な日記等を、ちゃんと整理してほしい」と頼むだけでなく、金銭処理まで陽太郎さんに頼んでいます。同じ土佐藩という山内家の元にはありますが、伊賀陽太郎は、馬場のそのような苦難を乗り切るために努力をしています。まさに、先ほど申しました、単に宿毛だけではなく、土佐藩のキーパーソン、ロンドンのキーパーソンの役割を果たしたということであります。

III

次に小野義真と小野梓についてお話をいたします。小野義真は早稲田では知られている人物ですが、詳細な伝記はないと思います。伊賀家に仕える重臣です。よく知られておりますように、宿毛には有名な岩村三兄弟（通俊、林有造、高俊）がいますが、その従兄弟に当たります。この小野義真は、その才覚、特にマネジメントに優れた方だと思われまます。義真さんは、宿毛仕置役竹内綱一吉田茂の実父一、物産方小野節吉一義真の実父一とともに宿毛の大坂蔵屋敷で活躍し、宿毛の財政の立て直しをいたしました。そして、そのマネジメント能力を発揮し、淀川の改修、お雇い外国人のデ・レーケらとともに大阪築港に努めます。さらに、工部省の改革に際して、山尾庸三一イギリスへの留学生で、工部大学校を作った立役者ですが一、井上勝一「鉄道王」と呼ばれますが一らとともに大きな役割を果たします。その役割は庶務専務、すなわちマネージャーとして役割です。その能力を井上馨も高い評価をしています。退官後、その能力を三菱の岩崎彌太郎が評価して、彼は三菱の顧問として大きな役割を果たしていきます。

小野梓と小野義真との関係ですが、義真の妹が小野梓の妻であり、小野梓の妹と小野義真の弟とが結婚しています。このように二人は姻戚関係にもありました。ところで、土佐は一八七〇（明治三）年に馬場辰猪ら五名をイギリスに

留学させますが、その中に小野梓は入っていませんでした。しかし、留学への想いを強くした小野梓は、義眞の支援を得て、留学のための英語を学ぶなどの準備をして、一八七二年にアメリカへ留学します。その事情は、現在開催中の「大隈重信と小野梓―建学の礎展―」の展示でも紹介されていますので、それをご覧いただきたいと思っています。

アメリカ留学中彼自身は、より優れた学習成果を得るためにアメリカからロンドンへと留学先を変える決心をします。一八七三（明治六）年の夏だろうと思います。その手助けをしたのも小野義眞です（小野梓の修行時代―小野梓宛伊賀陽太郎書簡の下書きから―『早稲田大学史記要』二〇一〇）。小野の渡英後のロンドンで馬場と小野梓は、共存同衆の基になる日本学生会という会を作りました。実は、この会の理解の相違が、小野梓と馬場辰猪とのその後の見解の違いを生んでいくのではないかと思っています。この学生会は、その後共存同衆になりますが、そのモデルになったのがイギリスの産業革命以後の社会の混乱を市民の手によって改革しようという大きな運動を支えていた社会科学促進協会でした。政治問題や女性問題やアヘン問題やさまざまな問題を扱う中で、イギリスを改革しようとしていました。そのイギリス社会科学促進協会は、単なるアカデミックな団体ではなく、多数の大衆をも参加者として巻き込み、年に一回開催の全国大会は大都市を順番に巡回し、その都市の一大イベントとなるようなまさに講演会組織だったので

す。

この社会科学促進協会をどのように理解したか問題だと思えます。馬場辰猪はこの大会に何度か参加しておりますけれども、小野梓には参加した形跡が見当たりません。小野梓は、結論から申しますと、その当時から、むしろ馬場のように大衆とその運動に関心をもったのではなく「イギリスの上流社会の人々と交わることが多くあった」と思えます。この違いを、どのように考えるか。その上流の人というのは、もちろん貴族ではなくて、市民だろうと思えます。

このように、社会科学促進協会、日本学生会、そして共存同衆という一連の「ソサエター」を馬場辰猪は、大衆・庶民のものとしたかったのではないか。それに対して、小野梓はむしろ東京大学の学生であった高田早苗、天野為之、市島謙吉、坪内逍遙など、鷗渡会と強く結びついていきました。事実、彼らは大隈の私学創設の理想に感銘を受け、東京専門学校創立に率先して参画しました。この小野の姿勢は、どんとんと庶民の方に入っていこうと馬場と対照的ですからあります。

彼らの組織した共存同衆は、知識の普及を意図して、社会科学促進協会に倣って「しょじやくかん」と読む図書館を立てます。小野義眞はそのために寄付をし、さらに梓が東洋書房を創立する際にも出資しますし、その富山房が小野梓の死去によって立ち行かなくなった際に、そこで働いていた宿毛出身の坂本嘉治馬によって再建されますが、その際に支援したのも義眞さんでした。このように宿毛の人脈、とりわけ財政的支援をしたのが義眞さんでした。

もともと、小野梓が一方的に義眞から益を受けわけだけではありません。一八八一年四月五日の小野梓の筆による鉄道会社発起人の特許の請願書ですけれども、小野義眞らが日本鉄道会社をまさに起業するに際して、井上勝と協力しています。その過程の中で、小野梓は、この草稿を書き、それによって義眞さんらの起業を支援したと思われる。少なくとも、この請願書に書かれているように、東京から青森への鉄道敷設こそ、義眞らがまさに考えていたものと同じでした。小野義眞は、小野梓が亡くなった際にはその葬儀の世話までしました。

IV

時間がありませんので、締めくくりたいと思います。先ほど話をしましたように、小野梓と馬場辰猪の視点がどん

どんと変わっていきました。すでに小野梓と鷗渡会との関係をお話しましたが、他方、馬場が組織したものに国友会があります。その名称は、よく知られているように、フランス革命期の新聞名から取ったものであり、鷗渡会そのものに比べれば、はるかに庶民へと、その視点を移すものでした。しかし、それにもかかわらず、馬場は、エリートとして、その庶民と自分との間に、萩原延壽さんの言葉で使わせてもらえば「うつくしき分裂」が生まれていたのも事実でした。延壽さんはその『馬場辰猪』の中で書いておられますが、馬場の心の中では民衆への関心を強く向けながらも、他方、エリートとしての馬場は、実際エリートだったわけですから、民衆との間のギャップに悩んでいたと思われるます。

この問題は、ジョン・スチュアート・ミルにもあつたかと思えます。ミルも、イギリスの労働者がいかなる改革の主役になりうるかということにずっと悩んでいました。そして、ミルは、労働者に対する批判と擁護との間で絶えず揺れ動いていました。この思想家、経済学者、哲学者であつたミルが死んだ一八七三年に馬場は留学していました。馬場は、その死を悼んで「ひとの生涯はどれほど短くとも、そのひとの為した仕事は、後世の人びとの記憶に長く生きる。さまざまな社会的偏見にたいして、率直で仮借のない批判を加えてミルに、深い敬意をおぼえずにはおられなかつた」と。自らの短命を予想していたかのようなことばだと思えます。

このような中、小野梓は帰国し、共存同衆を組織し、そして主役になります。しかし、その運営は必ずしも順調であつた訳ではありません。ただ、馬場が帰国すると一時期その活動は活発化し、渡英するとまた停滞していきまふ。しかし、ともかくも共存同衆が存続している間はともに協力し合いますが、共存同衆の雑誌が廃刊（一八八〇）されて以降、二人の意見の相違が顕在化していきます。最後、この点をお話をして、締めくくりしたいと思います。

75 レジユメの最後のページをご覧くださいと思います。ここでの結論めいたことは、あくまでも「土佐をモデル

にして」ということでして、これを一般化するつもりはありませんし、現段階では、それを裏付ける資料を明示することはできません。「結論に代えて」の最初に「ロンドンにおける日本の封建時代の再現」と書いています。これは馬場がロンドンでの日本人の関係を憂いた文章―私が最初に読み上げ馬場の文章ですが―の中にある『藩』ナシヨナリズム」という言葉に関わります。この言葉はあまり正確ではありませんが、江戸時代の「おらが国」という言葉であり、ついこの間までも日本で使われていた、まさに故郷を示す「おらが国」に関わっています。日本を近代化するためには、その「おらが国」という『藩』ナシヨナリズム」から脱皮する必要があり、そのために多くの藩は、そして幕府も、欧米を中心に留学生を送り出しました。

しかし、司会者から冒頭紹介していただいた『黎明期日本の経済思想―イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化―』（二〇〇六）で示しましたが、留学の成功者は恐らく二割ぐらいしかないと考えます。大半の留学生は学問についていけずに打ち破れて行方不明になったりしていきます。そういう大きな犠牲を払っても、各藩は近代化を図るために国家財政の負担になるほど多くの留学生を送り出しました。しかし、彼らには日本人としてのアイデンティティーが確立されていないために、『藩』ナシヨナリズム」に陥っており、それから脱皮するために馬場や小野が考えたのが、先ほど申しました日本学生会であり、共存同衆での活動なのです。

もちろん、その活動だけで、日本の近代化を実現できるはずはありません。しかし、その活動を通じて、近代国家の基礎としての「市民社会」を作ろうとしたのが馬場辰猪ではなかったかと、私は思っています。国家の形成を、小さな「ボランタリー・ソサイティー」の積み重ねの中で近代国家を作ろうと馬場は意図していたと想っております。というのは、その共存同衆という組織は、会長という名前の代表者を置かずに、仲間同士がいつでも参加し、退会もできる、極めて自由な組織でした。それは啓蒙団体である明六社とは根本的に異なったものだと、私は考えています。

しかし、実際には「市民社会」というものは、定義にもよりますが、日本では、戦前はもちろん戦後ですら形成されなかったという議論もあるぐらいですから、「市民社会」を核とする近代国家日本の形成という道によるのではなく、「他の人間への憎悪」(ヴァイツェッカー)としてのナショナリズムを奮い立たせることで、近代国家日本を作りあげる、いわゆる「上からの近代化」が現実的な手段であったように思います。そのためには兵制、幣制、法制、学制の近代化であり、それらすべては「上からの近代化」として推し進められたのです。大隈さんがこれらの近代化の推進の中で大きなお働きをされたのは、ご承知のとおりです。明治、法政など東京にある旧制大学のほとんどは法律学校から生まれています。

土佐を例にとりますと、法制整備の担い手としての小野梓がおり、近代国家のインフラ整備、とりわけ鉄道はその代表的なものだと思いますが、それを担ったのは小野義真であり、その鉄道敷設を契機として小岩井農場も生まれました。小岩井の「こ」は小野義真の「小」で、「いわ」は岩崎彌太郎の「石」で、「い」は井上勝の「井」なのです。井上勝の銅像が改造前の東京駅の前にありました。さらに近代産業の担い手として、今日は全く触れておりませんが、岩猪は引き受けましたが、その後、外国語教授、英語で法律などを教える学校として生まれ変わりました。ただ、レジュメにも書きましたけれども、この学校とは逆に、小野梓は、「学問の独立」ということを挙げて、外国語ではなくて日本語での学校教育を主張し、早稲田を創立しました。この違いもまた、大きな違いだろうと思います。

私たちは、近代国家創成の営みの中で必要される「ナショナリズム」とは何かを考え続ける必要があります。馬場の想いのように市民社会の成熟を基礎とする近代国家の形成が発展途上国で実現するのが困難だとすると、「上からの近代化」を支える「ナショナリズム」が必要とされ、それが日本のアジアへの侵略となったと理解できなくはない

だろうと思っています。すでに指摘しましたように「他の人間への憎悪」がナショナリズムの一つの定義だとすると、それが、日本の近代化、近代国家の形成をさらに促進させるという側面もあることになり、日本のアジアへの侵略を可能としたとも理解できるだろうと思います。

三分ほど過ぎましたけれども、これで終わりたいと思います。資料はあくまでも問題提起のためのものですので、一度お読みいただいて、ご自身でお考えをいただければと思っています。どうもありがとうございました。

【井上琢智氏配付資料】（部分）

I 土佐のイギリス留学生と小野梓

(1) 幕末・明治初期の留学生等派遣（イギリスを中心に）

- ①万延元（二八六〇）年 「大君の使節」条約批准のため 正使…新見豊前守正興（シシミ）
- ②万延二（二九六二）年 長州…伊藤博文、井上勝、山尾庸三ら5名
- ③文久二（二八六二）年 幕府…咸臨丸…西周、津田真道ら16名
- ④元治二（二八六五）年 薩摩…五代友厚、寺島宗則、森有礼、吉田清成ら19名
- ⑤慶応二（二八六六）年 幕府…中村正直、外山正一、菊池大麓、林董ら12名
- ⑥明治三（二八七〇）年 土佐…馬場辰猪、真辺戒作、国沢新九郎、深尾具作、松井正水の5名
- ⑦明治四（二八七二）年 土佐…片岡健吉…岩倉具視の欧米使節団（二〇月）

【注】片岡健吉のロンドン到着は明治四年七月で五年一二月までの約1年ロンドンに滞在し、馬場から英語の指導を受けた（萩原52頁）。

(2) 明治三～四年頃のロンドン

「此の時分、倫敦には、日本の学生が百人程いたので、辰猪は街に出る度毎、誰か知らん同国人に行きあはないことはなかつた。二人の日本人が倫敦の街で出会つたとするならば、互いに情熱を以て手を握り合ひ、互の身上その他

を尋ね合ふであろうと、誰でも想像するであろうと思ふ。ところが、実際の事実は吾々の予期とは全く反対のものであつた。彼等は互に何処の国の物だか知らなかつたやうに通り過ぎてしまふのであつた。それは、それ等の者どもも脳裡には大抵封建時代の強い感情がまだ十分に有るがためであつた。…彼等は…大名に支配されている…国の侍であつた…。彼等の狭い偏見では…同じ藩に属している者でない限りは、…敵として取り扱はなければならぬものだと思つている…。五百年程以前に廃滅しまつたのに、日本人がその英国で封建制度を立てようといふのだから、唯驚くより他はなかつたのだ。或る土佐藩の学生などは、薩摩の学生を見ると腹が立つて仕方ないと…。辰猪が倫敦へ勉学の為出てきた時の…有様」であつた（『自伝』『馬場辰猪全集』第3巻、73—74頁）。

II 伊賀陽太郎（一八五一—一八九七）

（1）伊賀陽太郎の略歴

- ① 山内容堂の甥として宿毛に、邑主の第12代生まれる（山内家の家老）。
- ② 戊辰戦争に際して宿毛の機勢隊を指揮し、土佐の東征軍に参加。
- ③ 自費でイギリス留学（一八七一—一八八二）。
- ④ 帰国後、三菱郵船、農商務省入省、東京商業学校教員、九一年退官。
- ⑤ 死去後、養子の氏広に男爵。

（2）小野梓への支援

- ① 一八七二年一月二日…伊賀陽太郎から小野梓へ“*How we are governed*”を送付。

②一八七二年一月二八日：小野梓の伊賀陽太郎宛書簡（未発見：依頼した図書入手出来ない旨の書簡か）

③一八七二年二月一〇日（投函：二一日）（下書き）【伊賀新資料】

（ア）「小野が法学の学習のために入手を長らく望んでいた“How we are governed”をイギリスで購入し、一月一二日に送付した」。

cf. de Fonblanque Albany (1829-1924) の著書

（イ）「小野梓の友人「Tamano」の死を悼み、アメリカ留学中の岩崎弥之助（一八七二年留学）との交流を喜ぶ」

（ウ）「いつも十分に身体に気をつけ、万事順調にいくように願っている」。

④一八七二年二月一三日：（下書き）【伊賀新資料】

（ア）「あなたと頻繁に連絡とれて嬉しい」。

（イ）「仲間との交流の喜びは重要な学習の邪魔になるというのが私の強い信念である」。

（ウ）「手紙のやり取りはすばらしい考えで、…互いの友情を強めることができる」。

（エ）「同郷の西村猪三郎のために、彼が望んでいるウェーランドの *The Elements of Moral Science* (1835) をアメリカで購入して送ってほしいと依頼し、その値段を知らせてほしい」と私費留学生小野を気遣っている。

（オ）岩倉使節団の目的である「留学生の整理」に言及し、伊賀はそのための試験をすべきであると主張し、すでに行われたアメリカでの「留学生整理」の実情を聞いている。

（カ）厳しいアメリカの寒さを思い、小野の健康を気遣っている。

(3) 馬場辰猪への支援

① 馬場の伊賀宛書簡（二八七八年二月九日）【伊賀新資料】

真辺戒作と喧嘩し、警察署に出頭し、未決収監所に収監された馬場から伊賀に訪ねてくれるように要請した書簡で、事実、伊賀は翌10日訪問している（『全集』第3巻、340、156）。

② 馬場の伊賀宛書簡（二八七八年二月二日）【伊賀新資料】

伊賀に「火曜日に：ハンマースミス警察法廷に来る」こと、ノートと草稿などを大切にしておいてほしいと依頼した書簡（『全集』第3巻、341—42、156）。

Ⅲ 小野義眞（一八三九—一九〇五）

(1) 小野義眞の略伝

① 宿毛の大庄屋の家に生まれ、岩村通俊（長男）、高俊（三男）、林有造（次男）の従兄弟

② 宿毛仕置役竹内綱（吉田茂の実父）、物産方下役小野節吉（義眞の実父）とともに大坂の蔵屋敷で活躍（宿毛財政の建て直し）。

③ 淀川改修・大阪築港に参加。

④ 竹内綱・岩崎彌太郎・岡本健三郎（由利公正のもとで会計官として出世）らに実力を認められる。その推挙で、工部省（M4）任官（山尾庸三による工部省改革で井上勝らに加えて小野が庶務専務）に参加。井上馨の評価あり。明治七年退官。

⑤ 小野梓の妹「安」と小野義眞の弟立田義敬とが結婚している（義兄）。義眞の妹（利遠）は梓の妻。

(2) 小野梓の学習・留学支援。

(3) 共存同衆書籍館建設寄付

- ① 岩崎弥太〈郎〉…200円、② 毛利…200円（朱抹）、③ 岩崎弥之〈助〉…100円（朱抹で50円へ変更）、④ 本願寺…100円、⑤ 万里・広橋など5名…100円（朱抹で50円へ変更）、⑥ 小野〈梓〉…50円、⑦ 小野義眞…50円、⑧ 熊谷〈辰太郎?〉…50円、⑨ 岩崎小〈二郎〉15円（朱抹で30円へ変更）など（一八七九『小野梓全集』5―72）。

cf. 一八七九年当時、小野義眞は岩崎弥太郎の代理人として岩崎に保険事業や東北・奥羽・北海道の道路・鉄道整備の委員会委員として活躍していた（この鉄道敷設への関与が後日本鉄道株式会社や小岩井農場の仕事となった）。

(4) 「代鉄道会社発起人請特許書」（一八八一年四月五日…小野梓筆）

「…近頃に及んで漸く一会社を創立し、漸次その路線を築造して之を全国に普及し、大に本邦の実利を企図し…第一に東京・青森間の築路に従事仕り、…東京・高崎間の路線を敷き、此の路線の中道よりして右折し之を青森に達し、又高崎の線路を拡張し漸次延て之を大津の線路に接続し、以て東西両京の連絡を通じ…独り起業有志者の企望を全ふするのみならず…本邦衆庶の福祉を増加するあらんとす。伏して請ふ…」〔『全集』4巻、120頁〕。

(5) 東洋書店開設支援（二八八二…銀行交渉や金銭的支援…総額2万円）と閉鎖

富山房設立の坂本嘉治馬（宿毛出身・父は伊賀の機勢隊に参加）を支援（200円）。

(6) 小野梓（二八八六）葬儀の世話

IV 馬場辰猪

(1) 馬場の留学の目的

① 「真辺と国沢は法律の修業：深尾、松井、馬場の場合には、海軍機関学の修業」(萩原、4頁)。

② 「同〈明治〉四年、土佐旧家老伊賀陽太郎、新たに自費を以て英国に留学すあり。辰猪勧むるに建築学を学ぶことを以てす。：健吉又曰く、君は官費を以て留学し、将来官吏とならず民間に下らんとする如きは、官金を私する者にあらずや。辰猪曰く、否、然らず、官金といふも、実は人民の財囊より絞りたる税金にすぎず、余は人民の金により、人民の爲め遊学す、何ぞ政府を顧慮せんや」(萩原、34頁〈寺石正路「土佐偉人伝」〉)。↓馬場の自由主義者・急進主義者としての原点。

(2) 小野梓と馬場辰猪との出会いと交流

① 「明治五年から七年の初頭にかけて大蔵省留学生として、ロンドンに滞在していた：小野の積極的な同意と協力を得ることができた。こうして、明治六年九月、日本学生会が発足したのである」(萩原、35—36頁)。

② 往復書簡(馬場↓小野)

(ア) 1875/6/17 Sent letters to Japan, Iwasaki <弥之助 or 小二郎>, Made <万里小路道房> &c.

(イ) 1875/7/12 Sent through Moridera <森寺常徳> letters to 万里、小野、岩崎、大内 <?>、Toda <?>, etc.
to home also.

(ウ) 1875/8/27 Wrote to Japan Ono and my home

(エ) 1875/10/16 Send a letter to Ono in Japan (『全集』第3巻、179—194頁)

③小野梓と馬場辰猪―業績の比較(一)

(ア) 『History of Japan』(Draft, 1883) へ *An Elementary Grammar of the Japanese Language* (1873)

(イ) 『羅馬律要』(一八七六)と『羅馬律』(一八七八―七九: 共存同衆講演17回連続 1878/10/23-79/7/23)

【参考】大久保「惟ふに泰西各土の律令: 其源を羅馬の古律」、「水に源流あり苟も其源泉の遠近を知らざれば未だ淵流の深淺長短を知るべからざる成り」、「問題関心は: 小野: ときわめて類似している。あるいは、馬場は小野のローマ法研究から強く影響を受けていたのかもしれない。: 共存同衆に集まる知識人が、小野を中心に、ローマ法について同様の問題意識を共有していたことが窺える」(279頁)。

(ウ) 交詢社(一八八〇) 発会式:

会 員: 旧幕臣・慶応・三菱・自由党(馬場)・立憲改進黨(大隈・小野)。

常議員: 獲得票・福沢(96)、西周(70)、菊池(392)、馬場(369)、林正明(202)、小野(193)(林と馬場のみが自由党)。

【注】林正明訳述『経済入門』(1873) フォーセット夫人の *Political Economy for Beginners* (1870) 訳述・中村正直序『経済弁妄』(1878) バスティア(1845-48)の英訳版からの重訳。

(エ) 東京専門学校(1882/10/21: 『学問の独立』)と明治義塾(1881/10/15)。

(オ) 立憲改進黨(一八八二)と自由党(一八八〇)。

④小野梓と馬場辰猪―業績の比較(2)

「共存同衆を共に担ったこの二人の人物の行動の軌跡が、もはやまったく交錯しなくなっていた」(萩原、151)の経緯。

(ア) 一八六二年

【小野】「士族から平民へ」と。

【馬場】藩派遣留学（官吏への道でなく人民のための留學子）。

（イ）留學中

【小野】「上流社会との交流」（西村、35頁）。

【馬場】「社会科学振興協会」への参加と市民との接点。

（ウ）一八七六年

【小野】司法省出仕（辞任）。

【馬場】生涯民間での活躍。

（エ）一八八一年四月

【小野】日本鉄道会社促進（鉄道、電信を備えた日本）西村、37頁。

一八八一年五月

【馬場】鉄道反対（内容不明、時期からして可能性あり）。

cf. 論点…当時イギリスで問題になっていた鉄の国有化・私鉄化？。

（オ）一八八一年六月

【小野】鷗渡会（東京大学学生の高田早苗、天野為之等）。

一八八一年四月

【馬場】国友会（フランス革命期の新聞名から）

馬場の葛藤…學術講演会から政談演説（大衆へ）。

cf. 馬場の講演会テーマについて（一八八一年前後…『全集』4巻）。

(カ) 往復書簡(小野↓馬場) 疎遠になった二人を取りなす伊賀陽太郎

「伊賀の御都合とともにハ無之哉、今日御宅へ御尋可仕心得ニ御座候処少々風邪之心地ニ御座候得ば罷出がたく幸に御近辺へ使者指出候へば一寸御尋ね申上候。」『全集』(六月一日・第4巻452頁・【注】この年代について解説は一八七八年から一八八〇年の間としているが、伊賀の帰国は一八八一年四月であるので、帰国後と考えられる。この年の六月二三日にこの三者が食事をしていることから考えて、この一八八一年であろうか)。

(キ) 一八八一年一〇月「明治二三年国会開設を旨とする詔書」(二院制)

【小野】「過激の変革を施し、以て社会の秩序を紊乱し、政治の進行を妨碍した」フランス(自由党)でなく「順正」の手段と着実の方便を以て、其の政治を改良前進した」イギリス(「立憲改進黨」萩原、157頁)。

一八八一年二月

【馬場】「議院は必ずしも二局を要せず」「上院は人民と利害を異にする者」であり「人民にとって有害」『国友会雑誌』36/37頁。

cf. 前提 a) 馬場の現状認識: 「官吏若くは貴族」と「人民」との利害対立

b) 「人民の立場の擁護」と「無知な人々」との間の葛藤: 馬場の「うつくしい分裂」(萩原、160)
cf. J・S・ミル(二八〇六―七三三)の労働者観と類似

『自伝』におけるミル観: 「ミルが社会の偏見に対して直截なる忌憚なき攻撃を加へたその態度に大に敬服した」(『全集』第3巻、75―76頁)。

V 結論に代えて―「おらが国」から「近代国家」 日本の形成―土佐藩をモデルにして

(1) ロンドンにおける日本の封建時代再現：「国」としての「藩」

↓「藩」 ナシヨナリズム

(2) 「藩」 ナシヨナリズムからの「脱皮」

① 留学生の派遣・馬場辰猪、真辺戒作、国沢新九郎、深尾貝作、松井正水

② 日本学生会（↓「共存同衆」）設立

(3) ナシヨナリズムの諸相（本報告に限定して）

① 「近代国家」の基礎としての「市民社会」の形成

↓馬場辰猪（自由主義者）か 急進主義者（ラディカリスト）

② 近代国家形成のための幣制・法制・学制の確立と近代産業の育成

↓法制整備の担い手としての小野梓

↓インフラ整備の担い手としての小野義真

↓産業育成の担い手としての岩崎彌太郎

③ 「他の人間への憎悪」（ヴァイツェッカー）としてのナシヨナリズム

↓アジア侵略・戦争の主因

【参考文献】

資料

- (1) 西田長壽・萩原延壽・川崎勝・杉山伸也・井上琢智『馬場辰猪全集』全4巻、一九八七―八八、岩波書店
- (2) 早稲田大学 大学史編集所『小野梓全集』全5巻、一九七八―八二、早稲田大学出版会
- (3) 井上琢智「幕末・明治・大正期 イギリス日本人留学生資料(1)」『経済学論究』(関西学院大学) 第56巻第4号(二〇〇三年三月)
- (4) 井上琢智「幕末・明治・大正期 イギリス日本人留学生資料(2)」『経済学論究』(関西学院大学) 第57巻第1号(二〇〇三年四月)

伊賀陽太郎

- (1) 井上琢智「イギリス留学生伊賀陽太郎宛書簡に見る日英交流(1)―イギリス人家庭教師ハムを中心に―」『経済学論究』(関西学院大学) 第61巻第3号(二〇〇八年二月)
- (2) 井上琢智「イギリス留学生伊賀陽太郎宛書簡に見る日英交流(2)―イギリス人家庭教師ハムを中心に―」『経済学論究』(関西学院大学) 第61巻第4号(二〇〇八年四月)
- (3) 井上琢智「小野梓の修行時代―小野梓宛下書きから―」『早稲田大学史記要』第41巻、二〇一〇年三月
- (4) 井上琢智「伊賀陽太郎の滞英時代の英文ノート」『経済学論究』(関西学院大学) 第63巻第4号(二〇一〇年三月)

小野義眞

- (1) 「小野義眞」宿毛明治100年史(人物) 編集委員会 『宿毛人物史』一九六八
- (2) 斎藤一寛 「早稲田大学と小野義眞」『早稲田大学史記要』第5巻、別冊、一九七二
- (3) 井上琢智 「小野義眞と日本鉄道株式会社」『経済学論究』第63巻、第3号、二〇〇九年十二月
- (4) 井上琢智 「小野梓の修行時代―小野梓宛下書きから―」『早稲田大学史要』第41巻、二〇一〇年三月
- (5) 大久保健晴 『近代日本の政治構想とオランダ』東京大学出版会、二〇一〇

馬場辰猪

- (1) 萩原延壽 『馬場辰猪』中央公論社(一九六七(中公文庫、一九九五))
- (2) 遠山茂樹 「自由民権運動と小野梓―馬場辰猪の思想との比較―」『早稲田大学史紀要』第19巻、一九八七
- (3) 井上琢智 「イギリス社会科学振興協会とヴィクトリア中期の女性問題」『大阪女学院短期大学紀要』18号、一九八七年
- (4) 井上琢智 「イギリス社会科学振興協会―その歴史―」『上ヶ原37年』久保芳和博士退職記念出版物刊行委員会、創元社、一九八八年
- (5) 井上琢智 「イギリス社会科学振興協会と経済学―『会報』を中心に―」『経済学論究』(関西学院大学) 第42巻第2号(一九八八年七月)
- (6) 井上琢智 「日本学生会、共存同業、イギリス社会科学協会」『馬場辰猪全集』第1巻、月報1、一九八七、岩波書店

(7) 佐藤能丸「馬場辰猪と小野梓」『馬場辰猪全集』第1巻、月報1、一九八七、岩波書店

(8) 井上琢智『黎明期日本の経済思想―イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化―』日本評論社、二〇〇〇

六年